いといふ話なんで。そこで私は初めて腑に落ちましたよ。《あつ、さうか！　あの隱者はこの仕事をセミョン・セミョーノヴィッチにさせよと言はれたんだな。成程さういふ仕事ならあの人の病氣にもいいだらう。奉加帳を持つて地主から百姓へ、百姓から町人へと歩きまはつてゐる中には他人がどんな風に暮らし、何に困つてゐるといふやうなことも知るだらうから、三つ四つの縣を歷廻つて歸つて來た時分には、あの人も市に住んでゐる連中などよりずつとよく、土地柄なり地方の事情に通じるやうになるだらう……。今はさういふ風な人物が必要なんだ》とね。あの公爵も私によく、『紙の上だけではなしに、實際に物事を正しく認識する官吏が得られるなら、どれだけ金子を出してもいい――紙の上では何一つ分るものではなく、結局、萬事がこんぐらかつてしまふだけだから』と言はれましたよ。」

「あなたは私をすつかりまごつかせておしまひになりましたよ、アファナーシイ・ワシーリエヴィッチ。」とフロブーエフは、吃驚して相手の顏を眺めながら言つた。「そんなことを本氣で私に仰つしやつてゐるんだとは、とても信じられませんよ。さういふ仕事をさせるには、根氣のいい、活動的な人間が必要です。それに第一、自活の出來ない家内や子供を打つちやつておく譯にも參りませんからね。」

「奥さんやお子供衆のことなら、かれこれ御心配には及びませんよ。手前がお世話を引受けて、お子さんにはちやんと家庭教師もつけますからね。どうせ袋をさげて施しを乞ふ位なら、自分の

ためではなく、神樣のためにした方が遙かに高尚でいいぢやありませんか。私が粗末な幌馬車を差上げますからね、少々搖れることぐらゐ氣になすつちや駄目ですよ――却つてあんたの健康のためになりますからね。また道中の用心のため、金子も差上げておきますから、途中でほんたうに困つてゐる人を御覽になつたら、惠んでやつて下さい。さうすれば、あんたもずゐぶん善行をなさることが出來る譯ですよ。もうあんたは決して他人を見そこなひなさらず、金子を惠んでやりなさるにしても、必らず惠み甲斐のある人間を選びなさることでせう。さういふ風にして旅をしながら、あんたはいろんな人々をお知りになる譯で……。これは人の怖がる役人の巡視とはちがつて、もしこれが役人だつたら……ですが、あなたが聖堂造營のための勸進に廻つておいでになるのだと分れば、みんな喜んでいろんな話をしてくれますからね。」

「それはほんとに素晴らしい御意見ですから、この私にたとへ一部分でもそれを果たすことが出來たらとは思ひますが、しかし私にはまつたく荷が勝ちすぎるやうですよ。」

「ぢやあ、いつたい我々凡夫に何が手に負へるといふのですかね？」と、ムラーゾフが言つた。『何一つ我々の手に負へることとてはなく、すべてが我々人間の力以上ぢやありませんかね。天の力を借りなくては何一つ出來るものではありませんよ。だが、祈りが我々を力づけてくれるのです。十字を切りながら人間が『主よ、憐み給へ！』と念じつつ、櫂をとつて漕いで行けば、いつかは彼岸に達することが出來るのです。そんなことをいつまでもぐづぐづ考へてゐるものでは

ありません。これもひとへに神命に外ならないと思へばいいのです。幌馬車の用意は今すぐに出來ますからね、さあ、一走り僧院長様のところへ行つて、奉加帳と祝福とを受けていらつしやい。そしてさつそく旅立ちなさることですよ。」

「ではお言葉に從つて、ひとへに神命だと思つてその仕事をお引受けいたします。」さう答へてから彼は、(主よ、祝福を垂れ給へ！)と心に念じた。すると勇氣と力とが鬱勃として魂の中に湧きあがるやうに思はれた。恰かも精神までが、その悲しい、出るに出られぬ苦境からやうやく逃れられるといふ一縷の望みに奮ひたつやうであつた。一道の光明が遠くの方でチラチラと閃きだしたのである……。

しかしフロプーエフのことはこの位にしておいて、チチコフの方へ眼を向けることにしよう。

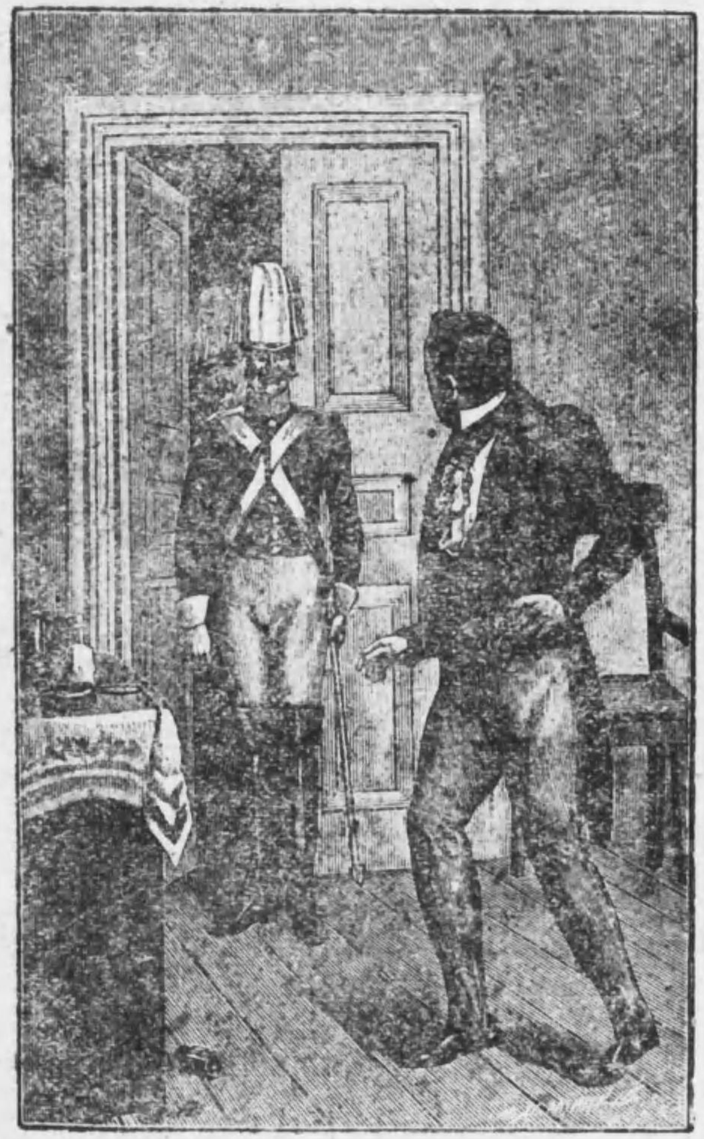
この間に事實いろんな請願が次々と矢繼ばやに提出された。これまで名前を聞いたこともないやうな親戚が續々として現はれた。ちやうど屍肉にたかる烏のやうに、老婆の殘して逝つた莫大な遺産をめぐつて、チチコフに對する告訴、第二の遺書の不正の摘發、第一の遺書の無效の告訴、金品の横領と資産隱匿に對する證言等、すつたもんだの騒ぎが持ちあがつたのである。その上にチチコフの死んだ農奴の購入や、稅關勤務中に彼の犯した禁制品の密輸等に關してまで、一々證

據があげられた。何から何まで穿鑿されて、彼の前身がすつかり知れ渡つてしまつた。そんなことまでいつたい何處から嗅ぎだしたものか、さつぱり見當がつかない。それにしてもチチコフが彼自身と四隅の壁より他には誰ひとり知るまいと思つてゐるやうなことまで、逐一摘發されてゐるのだから訝しい。尤も、今のところさういふことは一切、審理上の祕密にされてゐたため、チチコフの耳へはまだ入つてゐなかつたが、あれから程なく彼は顧問辯護士から親展狀を受取つて閲著の起こりさうなことは薄々感づいてゐた。その手紙には簡單に、『取急ぎ御報告申上げ候、例の件につき孰れ一騒動有之るべけれど、決して御懸念には及び申さず、沈著こそ何より肝要に御座候、然るべく萬端相片づけ申すべく候』と書いてあつた。この手紙を讀んで彼はすつかり安心した。『あの男はまつたく天才だ！』とチチコフは呟やいた。丁度その時、お誂へ向きに仕立屋が新調の服を届けにやつて來た。そこで彼は早速ナヴリノ風の炎色に煙色の混つた新調の燕尾服を着た自分の姿を眺めたいといふ烈しい慾望に驅られたのである。まづズボンをはいてみたが、どちらから見ても實に恰好よく、ぴつたりと身について、繪に描きたい位だ。兩方の腿にしろ、脹脛にしろ、實によく出來てをり、羅紗地にすつぽり包まれたいとも尋常な臀部が一層まるまると張り切つて見える。後ろで尾錠を緊めると、お腹がまるで太鼓のやうに前へ突き出た。彼はすかさずポンとそれを刷毛で叩いて、『この頓馬めが！　それでもこいつがなかなか繪畫的な效果をあげてやがるからなあ』と言つた。見たところ、上衣はズボンよりも一層出來がよく、小皺一

つよらず、びつたりと軀に合ひ、腰に沿つて程よく曲線を描いてゐた。少し右の腋の下が窮屈ではないかとチチコフが眦目を押すと、仕立屋はただにつこり笑つて、そのために却つて胴まはりがびつたりするのだと言つた。『どうか仕事の點だけは御安心なすつて下さいまし、御安心なすつて』と仕立屋は、得意の色もあらはに繰り返した。『まづ彼得堡以外では、何處へ行つてもこれだけの仕立は出來ませんよ。』さう言ふこの仕立屋は彼得堡からやつて來た男で、看板にも、『倫敦及び巴里生まれの外國人』、と銘が打つてあつた。この男は面倒なことが嫌ひだつたから、この二つの大都會を同時に竝べて他の仕立屋仲間にグウの音も出させまいといふ魂膽であつた。成程かうしておけば、この先きどんな仕立屋がやつて來ても、この二つの都會の名前だけは遠慮して、せいぜい『カルルスルーエ』とか、『コペンハーゲン』としか看板にも書くまいからである。

チチコフは氣前よく勘定を拂つて仕立屋をかへすと、一人になつて、ちやうど役者が耽美的な情緒をもつて con amore（戀ぼれと）にやると同じやうに、鏡の前に立つてゆつくり自分の姿を眺めはじめた。何もかもが前よりも一層好もしく思はれた。いやが上にも兩の頰は艶々として、顎は一段と愛嬌を帶び、白いカラーが頰を引立て、青い繻子の襟飾がカラーを引立て、新流行の胸當の褶が襟飾を引立て、豪奢な天鵞絨の胴衣がその胸當を引立て、更に、ナヴリノ風の炎色に煙色のまじつた燕尾服が絹のやうにピカピカ光りながら全體を引立ててゐる。軀を右に向けて見た――一層立派だ！　左に向けて見た――一層立派だ！　その折目正しいスタイルは、まづ侍從か、

又はいつも佛蘭西語で惡口をたたき、たとへ腹が立つても決して露西亞語で相手を呶鳴るなどといふことがなく、佛蘭西語の方言で叱つておくといつた紳士にそつくりで、まつたくお上品なものであつた！　彼は首を横へちよつと曲げて、恰かも極めて教養の高い中年の貴婦人にでも話しかけるやうな姿勢を取つてみた――何のことはない、まるで繪に描いたやうだ。畫家に彩管を揮はせて肖像にしたい位だ！　すつかり悦に入つてチチコフは、ちよつと舞踏の型で輕く跳躍を試みた。簞笥が搖れてオーデコロンの入つた硝子罎が下へ落ちた。が、それも何ら彼の心を亂す因にはならなかつた。さも仔細らしく、その間の拔けた硝子罎を馬鹿と呼んでおいて、《さて、眞先に誰のところへ行つてやるかな？　一番いいのは……》と考へた。そのとき不意に玄關で拍車のついた長靴の音がしたかと思ふと、まるで一軍を代表してゐるやうに、全身を武裝で固めた憲兵が入つて來て、『即刻、地方總督の許へ出頭せよとの命令ですぞ！』と言つた。あまりのことにチチコフは茫然自失してしまつた。彼の面前には、頭に馬の尻尾のやうなものをつけた、口髭いかめしい怪物が立ちはだかつた――左右の肩から肩帶を十字に綾取り、おそろしく大きな剛刀を腰にひつさげてゐる。片方の腰には鐵砲と、それから何かさつぱり譯の分らないものをぶらさげてゐるやうに思はれる。この人間ひとりの中に全軍團が潛んでゐるやうだ！　彼が言譯をしようとすると、その怪物は、『即刻にとの命令です！』と、劍もほろろな挨拶である。扉の隙間から玄關の方を見ると、そこにも別の怪物がゐるやうだ。窓から外を覗けば――馬車が一臺とまつてゐる。



《即刻地方總督の許へ出頭せよとの命令ですぞ！》

かうなつてはもう何とも仕様がない！　ナヴリノ風の炎色に煙色のまじつた燕尾服を著たまま否應なしに馬車へ乘せられて、全身をブルブル顫はせながら、憲兵に附添はれて地方總督の官邸へ護送されて行つた。

先方の玄關では心を取直す暇も與へられなかつた。『奥へお通りなさい！　公爵はお待兼です』と、當直の役人が言つた。チチコフの眼には、使丁どもが書狀の包みを受附けたりしてゐる玄關が、まるで霧につつまれたやうにチラリと見えただけで、すぐに廣間へ入つてゐた。彼はそこを通りながら、《かうしておれを逮捕するなり、裁判にも何にもかけずに、いきなり西伯利亞へ流刑してしまふんだな！》と思つた。彼の胸は、いかに嫉妬深い戀人の心臓も到底かなはないほど猛烈に波打つた。つひに運命の扉がさつと開いて、紙挾みや、戸棚や、書物で埋まつた總督室が現はれ、苦蟲を嚙みつぶしたやうな公爵の姿が眼についた。

《おれを滅亡させる暴君だ！》と、チチコフは呟やいた。《狼が小羊を牙に掛けるやうに、あの人はおれを血祭りにあげるのだ。》

「わしは君を氣の毒に思つて、當然このまへ監獄へ送るべきところを、特に許して市にゐさせてあげたのだ。それだのに君は、またしても古今未曾有の、破廉恥極まる惡事を働いたではないか！」公爵の唇は憤りに顫へてゐた。

「閣下、手前が一體どんな破廉恥な罪を犯したと仰つしやるのでございますか？」と、チチコ

フは全身をガタガタ顫はせながら訊ねた。

「あの女が、」と公爵は、少し前へ進み寄つて、チチコフの眼をハタと睨みつけながら言つた。「そら、君の口授であの遺書に署名をした女がつかまつて、君と對決を待つてゐるのだぞ。」

チチコフは眼の前が暗くなつたやうに思つた。

「閣下！　手前は事の眞相を申しあげます。なるほど手前が惡うございました。確かに惡うございました。けれど決してそれほど重い罪を犯した譯ではございません。敵に謀られたのでございます。」

「君を謀るなどといふことが誰に出來るものか。君の肚黑いことは、どんな奸譎無賴の徒の惡巧みより數等上だからなあ。君は恐らく今日まで、一生を通じて破廉恥でない所業とては何一つしてゐないだらう。君の儲けた金子は一哥の末に至るまで、みな墮劣極まる手段で手に入れたもので、その盜み騙りや破廉恥行爲は、笞刑か西伯利亞流刑に相當してゐるのだ！　いや、もうそろそろ年貢の納め時だぞ！　これから直ぐに未決監へ送られて、卑劣極まる惡黨や强盜と一緒に自分の罪の判決を待つがいい。それでもまだまだ輕い方なんだよ。お前はただの泥坊や追剝などよりずつと惡者なんだからな。彼奴らは百姓外套か羊の皮衣ぐらゐより他には著てゐないが、お前は……。」さう言つて彼は、ナヴリノ風の炎色に煙色のまじつた燕尾服をじろりと眺めながら引綱をつかんで呼鈴を鳴らした。

「閣下！」と、チチコフは叫んだ。「どうか手前を不憫に思つて下さいまし！　閣下も一家の主人でいらつしやいませう。手前に對してではなく、手前の年老いた母のために情けをおかけ下さいまし！」

「嘘をつけ！」と、公爵は赫つとなつて呶鳴つた。「この前は妻子を種にこのわしを泣き落しをつたが、お前にはてんで妻子などありはしなかつたぢやないか。今度はその手で母親を持ち出しをるのだ。」

「閣下！　手前は惡黨でございます、何とも仕樣のないやくざでございます。」とチチコフは聲も……に言つた。「なるほど確かに嘘を申しました。手前には妻もなければ子供もございません。けれど、いつかは妻を持ち、人間として、國民として義務を果たし、後には實際に同胞や要路の方面から尊敬を贏ち得たいものと、始終ねがつてをりましたことは神かけて僞りではございません……。ところが、何といふままならぬ運命でございませう！　閣下！　手前は日々の糧を得るのに血のにじむやうな思ひをしなければなりませんでした。行く先々に邪道への誘惑の網が張られ……敵や、手前に危害を加へたり財産を横領する手合ひが待ちかまへてゐたのでございます。手前の全半生は、さながら暴れ狂ふ龍卷か、または風のまにまに波間に漂ふ捨小舟のやうなものでございました。手前も一個の人間でございますよ、閣下！」

突然、彼の眼からは涙が潸然として迸り出た。彼はナヴリノ風の炎に煙のまじつたやうな燕尾

服と天鵞絨の胴衣を著こみ、繻子の襟飾をつけて、見事に仕立てられたズボンを穿いたまま、いきなり公爵の足下へ身を投げ出して、最上等のオーデコロンの匂ひのプンプンとする綺麗に分けた頭髪を振亂して、額を床に押しつけた。

「さあ、そこを退け！　この男を連れて行くやうに兵卒を呼べ！」と公爵は、そこへ入つて來た役人に言つた。

「閣下！」チチコフはさう叫びざま、兩の手で公爵の長靴に縋りついた。

公爵はブルッと全身に戰慄を感じた。

「こら、そこを退けといふのに！」と公爵は、チチコフのしがみついてゐる足を躍起になつて振りほどかうとしながら言つた。

「閣下！　お慈悲を懸けて下さるまでは、一歩もここは動きません。」さう言ひながらチチコフは、いつかな公爵の長靴を離さうとしないで、ナヴリノ風の炎に煙のまじつたやうな色の燕尾服を著たまま、公爵の足に取縋つて、床の上をのたうち廻つた。

「離せ、離せと言ふのに！」と公爵は、人が足で踏みにじる氣にもなれないやうな醜惡極まる蟲けらを見た時に感じる、あの何とも名狀し難い嫌惡の情を覺えながら言つた。公爵があまり烈しく足を振りまはすため、チチコフは鼻や、唇や、まんまるい顎にいやといふほど長靴のお見舞を受けたが、それでも彼は、いつかな手を離さないで、一層必死になつて長靴を抱きしめてゐた。

が、二人の頑丈な憲兵が無理矢理に彼を引き離すと、手取り足取り、幾つもの部屋を通つて引つ立てて行つた。彼はすつかり打ちひしがれ、顏色蒼白めて、人間の本性とは相容れぬ妖怪ともいふべき不可避的な暗黑の死に直面した時のやうな、一種無感覺な恐怖狀態に陷つてゐた……。

階段の上の扉口でばつたりとムラーゾフに出會つた。不意に希望の光りが心に閃めいた。その瞬間、彼は超自然的な膂力をふるつて、二人の憲兵の手を拂ぎはなしざま、呆氣にとられてゐる老人の足許へ軀を投げ出した。

「これはしたり、パーウェル・イワーノヴィッチ！　一體どうなすつたのですか？」

「助けて下さい！　監獄へつれて行かれるのです、私は死刑に……。」しかし憲兵は彼を引き起こすなり、答へを聽く暇も與へないで、ぐんぐん引つ立てて行つてしまふ。

守備兵の長靴と脚絆の臭ひがプンプン鼻をつく、じめじめして陰氣臭い物置――生地のままの卓子に二脚の汚ない椅子、鐵格子のはまつた窓、隙間から煙を吹き出すだけで少しも暖かくないボロ煖爐――これがそろそろ人生の歡びを味はひはじめ、ナヴリノ風の炎に煙のまじつたやうな色の、スマートな新調の燕尾服などを身にまとつて、同胞のあひだに注意を惹かれだした我等の主人公がいきなり拋りこまれた部屋であつた。彼は身のまはりの必需品は愚か、例の手箱を持つて來ることも許されなかつた。その手箱の中には恐らく……によつて得た金子も入つてゐた。いろんな書類や、死んだ農奴の登記證書など――それが今はみんな役人の手に押へられてしまつた

のだ。彼は床の上へばつたり身を投げ出した。と、絶望的な悲しみが肉を蝕む蛆蟲のやうに彼の心臓のぐるりに纏はりついた。その悲しみが、何の防禦もない心臓を、刻一刻と烈しく啄ばみはじめた。もう一日こんな日が、こんな悲しみの日がつづいたなら、チチコフは最早この世に存在しなかつただらう。しかしチチコフのためにも、大慈大悲の救ひ主の御手は休んでゐなかつたのである。一時間ばかり經つと牢屋の扉がばつと開いて、ムラーゾフ老人がつかつかと入つて來た。

もし誰かが、道中の塵と埃にまみれて、焼くやうな渇に苦しむ、疲勞困憊した旅人の乾ききつた咽喉を、冷たい泉の水で潤ほしてやつたとしても、今この哀れなチチコフが活氣づいた程には心も爽やかに元氣づくことはなかつたらう。

「ああ、私の救ひ主！」さう言つてチチコフは、身も世もあらぬ悲歎のあまりに俯伏してゐた床の上から、ムラーゾフの手をいきなり掴むと、慌しくそれを接吻して、自分の胸に押しつけた。

「この不仕合せな私をお訪ね下さるお志に對してだけでも、神様が屹度あなたにお酬いになることでございませう！」

チチコフは茲でわつとばかりに泣き出した。

老人は痛ましげな眼差で相手をじつと見詰めてゐたが、やがて、『ああ、パーウェル・イワーノギッチ！　パーウェル・イワーノギッチ、あんたはいつたい何といふことをなすつたのです！』と言つた。

「どうも仕方がありません！　魔がさしたのです！　程度といふものを知らず、ほどほどにしておくことが出來なかつたのです。呪はしい悪魔に誑かされて、人間としての理性や思慮分別といふものを失つてしまつたのです。私は罪を犯しました、たしかに罪を犯しました！　しかし、どうしてこんな扱ひを受けるのでせう？　貴族を、苟しくも貴族を、一回の裁判もなく、一回の審理もなく、いきなり監獄へぶちこんでしまふなんて！……貴族をですよ、アファナーシイ・ワシーリエギッチ！　それに、ちよつと宿へ歸つて、身のまはりの物を片附ける暇ぐらゐは與へてくれてもいいぢやありませんか？　宿には今、私の持物が何もかも放つたらかしになつてゐるのです。そら、あの手箱、あの手箱もですよ、アファナーシイ・ワシーリエギッチ！　あの中には私の全財産が入つてゐるのです！　あれは額に汗を流して手に入れたものです、膏血と永年の困苦と缺乏によつて……。あの手箱が、アファナーシイ・ワシーリエギッチ！　ああ、何もかも盗まれてしまひます、滅茶々々にされてしまひます！　ああ、神様！」

そして、またしても胸に迫り來る悲しみの發作に堪へかねて、彼はおいおいと聲をあげて泣きだしたが、その聲は厚い牢屋の壁を貫いて、ずゐぶん遠くまで空ろに響いて行つた。彼は繻子の襟飾を引きちぎり、襟を掴んで、ナヴリノ風の炎に燻のまじつたやうな燕尾服をビリビリと引き裂いた。

「やれやれ、パーウェル・イワーノギッチ！　その財産といふ奴があなたを盲目にしたので

す！　それがために自分の怖ろしい境遇が分らなかつたのですよ。」

「私の恩人様、どうぞ私をお助け下さい、お救ひ下さい！」と、哀れなバーウェル・イワーノギッチは相手の足許へ身を投げて、必死になつて喚いた。「公爵はあなたが好きですから、あなたのためならどんなことでもされます。」

「いやいや、バーウェル・イワーノギッチ、いくら私がさうしたいと思つても、所詮それは出來ない相談ですよ。あなたを拘束してゐるのは冷酷な法律の力で、決して人間の權力ではないのですからね。」

「あの腹黒い悪魔めが、碌でなしの畜生めが私を殺はしたのです！」

チチコフは頭を壁にぶつつけたり、拳が血だらけになるほど卓子を手でひつぱたいたりしたが別に痛みも感じなければ、ひどく打つたといふ感じすら覺えなかつた。

「バーウェル・イワーノギッチ、さあ心をお鎮めなさい、そして人間とではなく神様と和解するのだとお思ひなさい。御自分の不幸な魂のことをお考へになることですよ。」

「ですけれど、何といふ運命でせう、アファナーシイ・ワシーリエギッチ！　誰かほかにこんな運命に見舞はれた人間があるでせうか？　私は辛抱に辛抱をして、いはば血の出るやうな思ひをして一哥二哥と蓄めたのです。それも決して他人の物を掠めたり、またよくあるやうに公金を着服したりしたのではなく、額から汗を流して、せつせと蓄めたのです。何のために一哥二哥と

稼ぎ蓄めたのでせう？　それは餘生を不自由なく安穏に送り、また祖國の繁榮と祖國に對する奉仕のため豫々もちたいと心懸けてゐる妻子に、それを殘してやりたいと思へばこそです。これが私の金子を蓄めたいと思つた譯なんです！　なるほど私は道に外づれたこともいたしました……しかしそれも仕方がなかつたのです！　私が曲つた道を通つたのは、ただ、まともな道を歩いてゐたのでは何物も得られない、傍道を行つた方が遙かに手つ取りばやいと思つた場合に限つてゐるんです。私は一心になつて努力しました。人の物を取つたことがあるとすれば、それは金持から取つただけです。ところが、裁判所に巣くうてゐる悪黨どもはどうです、何千といふ公金を掠めたり、貧乏人を搾取つたり、何一つ持つてゐないやうな人間の最後の一哥まで搾り取つてゐるぢやありませんか！……どうして私はかう不運なんでせう？——やうやくのことで努力の結果が現はれて、もう一息でそれに手が屆きかけると、そのたんびに、必らず不意に暴風雨が起こるとか、思ひがけない暗礁に乘りあげるとかして、船體が木葉微塵に碎けてしまふのです。私の財産は三十萬留そこそこにはなつてをりました。三階建の家もありましたし、村は二度までも買ひました……。ああ、アファナーシイ・ワシーリエギッチ！　どうして私はこんな……？　どうしてこんな酷い目に逢ふのでせう？　それでなくても、私の半生は波に漂ふ捨小舟も同樣でしたのに！　天の正義は一體どこにあるのです？　辛抱と、頑ひなき不撓不屈の努力に對する酬いは一體どこにあるのです？　私は三度も新規播直しをしました。何もかも失つて、裸一貫から新規に

始めたのです。これがもし他人でしたら、遠の昔に自暴を起こして、飲んだくれた擧句、居酒屋でくたばつてしまつてゐたでせう。私はまつたく、どれだけ奮闘し、どれだけ忍耐しなければならなかつたでせう！　一哥々々を、いはば全身全靈の力を傾けて獲得したのです！……他人は容易く手に入れるかもしれませんが、私にとつては、諺にもいふ通り、一哥の銅貨も汗と膏の塊りだつたのです。私がどのやうな不撓不屈の努力をもつて、その汗と膏の一哥を手に入れたかは、ちやんと神様が御存じです……。」

堪へ難い心の痛手に聲をあげておいおい泣き出した彼は、椅子の上へ崩折れると、裂けてぶらさがつてゐた燕尾服の裾をビリッと引きちぎつて投げすて、前にはあんなに骨折つて大事にしてゐた髪の毛へ兩手を突つ込んで、情け容赦もなく掻き搔つて、肉體的な苦痛を樂しみながら、消し難い心の痛手を忘れようとするのであつた。

ムラーゾフは長い間、初めて見るこの狂暴な……をじつと眺めながら、默然としてその前に坐つてゐた。まだつい今の先きまで、世故に長けた人間か軍人のやうな闊達自在な敏捷さでもつてあちこちを飛びまはつてゐた、この不運で冷酷な男が、今や燕尾服は破れ、ズボンの釦は外づれたまま、傷ついた血まみれの拳を振りまはしながら、人類を毒する悪魔に向つて呪ひの聲を浴びせながら、取り亂した無作法な恰好でのたうちまはつてゐるのである。

「ああ、パーウェル・イワーノギッチ、パーウェル・イワーノギッチ！　もしもあなたがその

同じ精力と忍耐とを立派な目的に向けて、ひたすら善事に盡瘁されたなら、どんなに偉い人物になつてをられたことでせう！　それこそ、定めし多くの善根を積まれたことでせう！　善を愛する人間がただの一人でも、あなたが一哥二哥を得るために費されたほどの努力を拂ひ、また一哥二哥を得んがためにあなたが惜まれなかつたやうに、我が身を惜まず、善のために自身の體面や自尊心を犠牲にすることが出來たならば、ああ、それこそどんなにこの世界は繁榮してゐたことでせう！……パーウェル・イワーノギッチ、パーウェル・イワーノギッチ！　情けないのはあなたが他人に對して罪を犯されたことではなく、あなた御自身に對して罪を犯されたことです――折角あなたに惠まれた豐かな才能と精力を、間違つた道に費されたことです。たしかにあなたは大人物になり得た方だのに、道を踏み誤つて身を滅ぼしなすつたのです。」

人間の魂は不思議なもので、さ迷へる者がどんなに遠く正しい道を踏み外づしてゐるにもせよ、正道に立返ることの出來ぬ罪人がどんなに感情を荒ませてゐるにもせよ、又さういふ人間が墮落した生活にどんなに固執してゐるにもせよ、彼の自から毫無しにした美質を楯に問責すれば、相手は我れにもなく魂を搖ぶられて、わなわなと顫へ出すものである。

「アファナーシイ・ワシーリエギッチー！」さう言つて哀れなチチコフは兩手でムラーゾフの手を掴んだ。「ああ、もしも私が放免されて、財産を取戻すことが出來ましたなら！　私は誓つて、今日只今からすつかり生まれかはつたやうな生活をいたします！　どうかお助け下さい、恩人様、

露光量違いの為重複撮影

どうかお救ひ下さい！」

「私にどうすることが出來ませう？　私は法律を向ふに廻さなければなりませんからね。假に私が思ひ切つてその氣になつたとしても、どこまでも公爵は眞直ぐな方ですから、決して讓歩される筈がありませんよ。」

「私の恩人樣！　あなたはどんなことでもお出來になります。法律など私は怖ろしいとは思ひません――法律に對抗する手段なら幾らでも見つけることが出來ます――けれど、罪もないのに監獄へ抛りこまれて、このまま野良犬のやうに斃ばつてしまふのは堪りません、私の財産や、書類や、手箱が……。ああ、どうかお助け下さい！」

彼は老人の足を抱きかかへて、涙でそれを濡らした。

「やれやれ、パーウェル・イワーノギッチ、パーウェル・イワーノギッチ！」と、ムラーゾフ老人は頭を振りながら言ふのだつた。「その財産にあんたは眼がくらんでしまつてゐるのです――そのためにあなたは、自分の哀れな魂の聲にも耳を傾けることが出來ないのですよ。」

「その魂のことも考へるやうにしますから、どうか、兎に角お助け下さい！」

「パーウェル・イワーノギッチ！……」と、ムラーゾフ老人は少し言ひ淀んでから、つづけた。

「あなたをお助けすることは私の力に及びません――それはあなたにもお分りのことです。だが幾分でもあなたの罪が輕くなるやうに、又どうかして放免になるやうに、一つ出來るだけ骨折つてみることにしませう。それが成功するかどうかは分りませんが、まあ、骨を折るだけは折つてみませう。それがもし萬に一つも成功した暁にはですねえ、パーウェル・イワーノギッチ、私は自分の骨折りに對する報酬として、今後あなたが富を獲得しようなどといふ野心はさらりとお捨てになるといふ約束をして頂きますよ。まつたくのところ、私が假に今、財産を全部なくしたとしましても――私の財産はあなたのよりはちよつと大きいつもりですがね――それでも、まさか私は泣くやうなことはしないつもりですよ。なんの、なんの、他人が私の手から奪ふことの出來るやうな財産などは問題ぢやありません、誰にも掠めたり取りあげたりされることのないものが大切なんです！　あなたはもうかなり浮世の風にも當つておいでになる。現に御自身の境遇を浪に揉まれる捨小舟だと言つておいでになるではありませんか。既にあなたの手許には、餘生を安樂に送るだけの財産はおありになる譯です。どこか淳朴な人々の住む、お寺に近い、靜かな土地へ過塞なさることです。それとも、どうしても子孫を後に殘したいといふお望みなら、質素な生活に慣れた、控へ目な、氣立のやさしい、あまり豐かでない娘と結婚なさるもいいでせう。この騷々しい世の中のことや、いろんな淺ましい世間的な野心を殘らず忘れておしまひなさい。また世間からも忘れられてしまふのです。所詮この娑婆には安息といふものがありませんからね。あなたも御存じの通り、凡そこの娑婆は、敵と、誘惑者と、裏切者の寄合ひ世帶なんですからね。」

「乾度お言葉に從ひます、乾度お言葉に從ひます！　私はもう前から、ちやんとした生活を送

露光量違いの為重複撮影

どうかお救ひ下さい！」

「私にどうすることが出來ませう？　私は法律を向ふに廻さなければなりませんからね。假に私が思ひ切つてその気になつたとしても、どこまでも公爵は眉唾ぐ者ですから、決して謂はされはしませんよ」

「お嬢さま！　あなたはどんなことでもお出來になります。法律など私は怖ろしいとは思はない。ルーシー　法律に對抗する非度なら幾らでも見つけることが出來ます――それと、罪ふないのに陛下に捕りこまれて、この哀れな野良犬のやうに嬲ぶつてしまふのは堪りません、私の財産や、料類や、手間賃　。あゝ、どうかお助け下さい！」

彼は老人の足を抱きかかへて、涙でそれを濡らした。

「やれやれ、パーウェル・イワーノヴッチ、パーウェル・イワーノヴッチ！」と、ムラーゾフ老人は頭を振りながら言ふのだつた。「その財産にあんたは眼がくらんでしまつてゐるのです！　そのためにあなたは、自分の哀れな魂の聲にも耳を傾けること所出來ないのです！」

「その魂のことも考へるやうにしますから、どうか、兎に角お助け上さい！」

「パーウェル・イワーノヴッチ！……」と、ムラーゾフ老人は少し言ひ淀んでから、つづけた。「あなたをお助けすることは私の力に及びません――それはあなたにもお分りのことです。だが幾分でもあなたの罪が輕くなるやうに、又どうかして放免になるやうに、一つ出來るだけ骨折つ

てみることにしませう。それが成功するかどうかは分りませんが、まあ、骨を折るだけは折つてみませう。それがもし萬に一つも成功した暁にはですねえ、パーウェル・イワーノヴッチ、私は自分の骨折りに對する報酬として、今後あなたが富を獲得しようなどといふ野心はさらりとお捨てになるといふ約束をして頂きますよ。まつたくのところ、私が假に今、財産を全部なくしたとしましても――私の財産はあなたのよりはちよつと大きいつもりですがれ――それでも、まさかるやうな財産などは問題ぢやありません、誰にも掠めたり取りあげたりされることのないものが大切なんです！　あなたはもうかなり浮世の風にも當つておいでになる。現に御自身の境涯を浪に揉まれる拾小舟だと言つておいでになるではありませんか。既にあなたの手許には、餘生を安樂に送るだけの財産はおありになる譜です。どこか淳朴な人々の住む、お寺に近い、靜かな土地へ謹寂なさることです。それとも、どうしても子孫を後に殘したいといふお望みなら、質素な生活に慣れた、控へ目な、気立のやさしい、あまり豐かでない娘と結婚なさるもいいでせう。この騒々しい世の中のことや、いろんな淺ましい世間的な野心を殘らず忘れておしまひなさい。また世間からも忘れられてしまふのです。所詮この婆婆には安息といふものがありませんからね。あなたも御存じの通り、凡そこの婆婆は、敵と、誘惑者と、裏切者の寄合ひ世帶なんですからね。」

「屹度お言葉に從ひます、屹度お言葉に從ひます！　私はもう前から、ちやんとした生活を送

露光量違いの為重複撮影

りたいと始終さう思つてゐたのです、農業に身を委ねて、生活を引締めようとも考へました。それだのに、誘惑者の悪魔に惑はされて、道を踏みはづしたのです、あの悪魔めが、鬼めが、畜生めが！」

これまでつひぞ知りもしなければ、身に覺えもなく、我れながら何とも説明の出來ない或る感情が彼に襲ひかかり、恰かも何物か、遠い遠い昔の、或る……、過酷なばかりで無意味な教訓や、退屈な少年時代の味氣なさや、生家の荒寥たる有様や、孤獨の淋しさや、物心づいて最初に受けた窮乏と赤貧の印象などによつて、幼少の頃から抑壓されてゐた或るものが今や彼の内部に目覺めようとして、多の吹雪に塞された朧ろげな窓越しに氣不味く彼をチラと一瞥した険しい運命の眼差に射竦まされてゐた或るものが、今や自由に飛び立たうとするかのやうであつた。彼の口からは呻き聲が漏れた。彼は兩手で顔を蔽ふと、『本當です、まつたく本當です！』と、痛ましい聲で言つた。

「結局、あなたの世俗的な知識や、豐富な經驗も、根本に於いて道に外づれてゐたため何の役にも立たなかつたのです。ああ、これがもし正當な基礎に立つてゐたなら！……ほんとに、パーウェル・イワーノギッチ、どうしてあなたはあたら自分といふものを臺無しにしてしまつたのです？　眼をお覺しなさい、今からでも遲くはありません、まだ間に合ひます……。」

「いいえ、もう駄目です、手遲れです！」と、チチコフは呻くやうに言つたが、その聲を聞く

とムラーゾフは胸も潰れる思ひだつた。「今にして私は、自分が間違つた道を辿つてゐて、正しい道から遠くかけ離れてしまつてゐることに、やつと氣がつきかけましたが、しかしもう駄目です！　ええ、そもそもの生ひ立ちからして間違つてゐたのです。父は七諄く私にお説教をしたり、打ち打擲をしたり、道德的な格言を寫させたりしながら、そのくせ私の眼の前で隣人の森を盜み、おまけにその手傳ひまで私にさせたものです。また私の面前で理不盡な訴訟を起こしたり、自分が後見してゐる身寄りのない娘を墮落させたりもしました。かういふ手本の方がどんな格言より強い力を持つてゐます。ねえ、アファナーシイ・ワシーリエギッチ、私は決して自分がまともな生活を送つてゐないと知つてゐながら、大してその悪德に嫌悪を感じないのです。本性からして荒んでしまひ、善に對する愛もなければ、末には習慣となり第二の天性となるところの、德行に對するあの美しい衝動も起こらないのです……。富を得んとして離隴するほどの熱意が善のためには湧いて來ないのです。本當のことを申しあげるのです――何とも是非がありません！」

老人は深く歎息した……。

「パーウェル・イワーノギッチ！　あなたには堅い意志と、そして強い忍耐力がおありになる。藥は苦くても、他に恢復の道がないと分れば、病人は甘んじてそれを飲みます。善に對する愛があなたにないのなら――では、愛はなくとも無理矢理にでも善を行ひなさい。さうすれば、あなたにはそれが、なまなか愛をもつて善を行つてゐる人より、一層大きな功德になりますよ。初め

露光量違いの為重複撮影

りたいと始終さう思つてゐたのです、農業に身を委ねて、生活を引締めようとも考へました。それだのに、誘惑者の悪魔に惑はされて、道を踏みはづしたのです、あの悪魔めか、鬼めか、畜生めが！」

これまでつひ考へもしなければ、身に覺えもなく、我れながら何とも説明の出來ない或る感情が後に襲ひかかり、恰かも何物か、遠い遠い昔の、或る……、過酷なばかりで無意味な教訓や、退屈な少年時代の味気なさや、生家の荒廃たる有様や、孤獨の淋しさや、物心ついて最初に受けた郷愁と疲労の印象などによつて、幼少の頃から抑壓されてゐた或るものが今や彼の内部に目覺めようとして、多の吹聲に塞された臓ろけた緊張しに気味悪く彼をチラと一瞥した險しい運命の眼差に射竦まされてゐた或るものが、今や自由に飛び立たうとするかのやうであつた。彼の口からは呻き聲が漏れた。彼は両手で顔を蔽ふと、「本當です、まつたく本當です！」と、痛ましい聲で言つた。

「結局、あなたの世俗的な知識や、豐富な經驗も、根本に於いて道に外づれてゐたため何の役にも立たなかつたのです。ああ、これがもし正當な基礎に立つてゐたなら！……はんとに、パーウェル・イワーノヰッチ、どうしてあなたはあたら自分といふものを蔑無しにしてしまつたのです？　眼をお覺しなさい、今からでも遅くはありません、まだ間に合ひます……。」

「いいえ、もう駄目です、手遅れです！」と、チチコフは呻くやうに言つたが、その聲を聞く

とムラーゾフは胸も潰れる思ひだつた。「今にして私は、自分が間違つた道を辿つてゐて、正しい道から遠くかけ離れてしまつてゐることに、やつと氣がつきかけましたが、しかしもう駄目です！　ええ、そもそもの生ひ立ちからして間違つてゐたのです。父は七歳く私にお説教をしたり、打ち打擲をしたり、道徳的な格言を寫させたりしながら、そのくせ私の眼の前で隣人の森を盗み、おまけにその手傳ひまで私にさせたものです。また私の面前で理不盡な訴訟を起こしたり、自分が後見してゐる身寄りのない娘を墮落させたりもしました。かういふ手本の方がどんな格言よりも強い力を持つてゐます。ねえ、アファナーシイ・ワシーリエヰッチ、私は決して自分がまともな生活を送つてゐないと知つてゐながら、大してその惡徳に嫌悪を感じないのです。本性から荒んでしまひ、善に對する愛もなければ、末には習慣となり第二の天性となるところの、惡行に對するあの美しい衝動も起こらないのです……。富を得んとして陶醉するほどの熱意が善のためには湧いて來ないのです。本當のことを申しあげるのです――何とも是非がありません！」

老人は深く嘆息した……。

「パーウェル・イワーノヰッチ！　あなたには堅い意志と、そして強い忍耐力がおありになる。藥は苦くても、他に恢復の道がないと分れば、病人は甘んじてそれを飲みます。善に對する愛があなたにないのなら――では、愛はなくとも無理矢理にでも善を行ひなさい。さうすれば、あなたにはそれが、なまなか愛をもつて善を行つてゐる人より、一層大きな功徳になりますよ。初め

二三度だけ強ひて行つて御覽なさい――そのうちには愛が生まれますからね。ちやんとさういふ具合になることを信じなさい。『極樂へ行くのも努力次第』といふではありませんか。ひたぶるに力づくでそれに到達するのです……力づくで到達して、力づくで占領しなければ駄目ですよ。ああ、パーウェル・イワーノギッチ！　あなたは他人の持つてゐない力を、あの鐵のやうな忍耐力を具へていらつしやるぢやありませんか――そのあなたにどうして克服できないものがありませう？　あなたは豪傑にだつてなれる方だと思ひますよ。當節の人間はどれもこれもまるで意志のないひよろひよろばかりですからね。」

明らかにかうした言葉はチチコフの魂の中へと滲みこみ、その奥底に於いて一種の名譽心を掻きたてた。決意、とまではいはれないにしても、それに近い或る鞏固なものが彼の眼差に閃めいた……。

「アファナーシイ・ワシーリエギッチ！」と、彼は毅然として言つた。「もしもあなたの御奔走で私が釋放されて、幾らかでも財産を持つてここを落ちのびることが出來ましたなら、誓つて今までとは別な生活を始めます。ちよつとした村でも一つ買つて、一家の主人となり、自分のためではなく、他人を援けるために金子をため、力の及ぶ限り善行をつみます。自分のことや都會的ないろんな美食や宴會のことはふつつり忘れて、質素で眞面目な生活をおくる覺悟です。」

「どうか、あなたのその御決心を神様がお力づけになりますやうに！」と、老人は非常に喜んで言つた。「では極力あなたの釋放方を公爵に歎願してみませう。うまく行くか行かないか、保證はできませんがね。いづれにしても、あなたの罪が少しでも輕くなることは確かでせう。ああ、やれやれ！　では一つ私を抱擁して下さい。私もあなたを抱擁させて頂きますよ。あなたから今のお言葉を聞いて、ほんとにこんな嬉しいことはありません！　では待つていらつしやい、これからさつそく公爵に會つて來ますからね。」

チチコフは一人あとに殘つた。

彼の本性は根柢から動かされて、すつかり柔らげられたのである。あらゆる金屬のうちで最も硬度が高く一番耐火性の強いプラチナでも、爐の火力がだんだん強まり、鞴の風がいよいよ加はつて火熱が極點に達すると、遂には熔解する――頑強なこの金屬が白つちやけてどろどろの液狀に變るのである。それと同樣に、苦患の炎が彌增につのつて、その強情我慢な本性が不幸の坩堝で極度に熱せられると、如何に頑固一徹な人間も遂にはへたばつてしまふ……。

（おれ自身には出來ない相談で、到底そんな氣持にはなれないけれど、せめてさういふ氣持を他の人間に抱かせるやうに全力を傾けよう。自身は劣等な人間で、何一つ……ないけれど、せめて他人を奮起させるために全力を盡さう。自分自身は不甲斐ない基督教徒だけれど、せめて他人を誘惑に陷れぬやうに努力しよう。孜々として勵むのだ、額に汗して、田舍でせつせと働きながら他人によい感化を及ぼすやうに飽くまで誠意をもつて盡すのだ。實際のところ、まだおれは徹

露光量違いの為重複撮影

頭徹尾のやくざになりさがつた譯ではない！　一家を經營して行く能力もあれば、節約とか、機敏とか、常識といふやうな持前の上に、ねばり强さといふ武器まで具へてゐるのだ。ただ、決行する覺悟さへ出來れば……。)

こんな風に考へながらチチコフは、魂の半ば目覺めた力によつて何物かを感得したやうに思はれる。彼の本性は、人間が置かれるそれぞれの環境によつて彼をめぐつて渦卷く一切の事態、紛糾、動向の如何に拘らず、いつ如何なるところでも遂行し得る或る一つの義務があつて、人間はそれを是非この世で果さなければならないといふことを、朧げながら悟つたやうである。そして都會の喧騷や人間が勞働を忘れて安逸無爲のあひだに思ひついたいろんな誘惑から遙かに懸離れた勤勞生活といふものが、眼前にまざまざと描き出されたため、彼は殆んど自分の不愉快な立場もすつかり忘れてしまひ、剩つさへ、自分がもし釋放されて、たとへ一部でも……を取り戻すことが出來さへすれば、この手酷い打擊をも恐らくは神の攝理として感謝しようと心に思つたのである。が、その時、彼の拘禁されてゐる汚ない納屋の片開扉がさつと開いて、一人の役人が入つて來た――サモスギートフといふ樂天家で、なかなかの敏腕家だ。肩幅が一アルシンもあり、足がすらりとしてゐて、同僚たちの言葉によれば、仲間としては申し分のない人間で、大の放蕩兒で無賴漢だとのこと。かういふ男は戰爭にでも行けば思ひ切つた偉功をたてるもので、容易に近づき難い危險な敵陣を突破して、敵兵の鼻の先きでまんまと大砲を盜み取るといつたやうな適當

をさせたら、それこそうつてつけであらう。が、さうした軍籍に身を置いたら恐らくは廉直な人間になつてゐた筈の男が、その道に入らなかつたばかりに、今は只管よからぬことをするのに汲汲としてゐたのである。實に不可解なことであるが、この男には不思議な信念と捷とがあつた。彼は同僚に對しては飽くまで誠實で、決して仲間を裏切るやうなことがなく、約束をした限り必らずそれを守つたけれど、自分より目上の役人に對しては、恰かもそれを敵の砲兵陣地か何かのやうに見做して、あらゆる弱點、あらゆる間隙、もしくは手ぬかりに乘じて、一擧に突破しなければならないと考へてゐたのである。

「あなたのお身の上は何もかも知つてゐますよ、すつかり聞きましたからね！」と、彼は自分の後ろで扉がぴつたり閉まつたのを見すまして言つた。「なあに、大丈夫ですよ！　びくびくなさることはありません、何とかなりますからね。あなたのためにみんなで一肌ぬぎますよ――あなたの手足と同樣に働きますからね。で、一同に對して三萬留だけ出して頂けば、あとは何もいりませんよ。」

「ほんとですか？」と、チチコフは口走つた。「それですつかり身のあかりが立つのですか？」

「ええ、すつかり！　その上に損害賠償まで受けられますよ。」

「で、そのお骨折りに對しては？」

「それが三萬留ですよ。何もかも引つくるめてそれだけなんです――我々の頂く分も、總督側

露光量違いの為重複撮影

頭徹尾のやくざになりさがつた譯ではない！　一家を經營して行く能力があれば、節約とか、機敏とか、常識といふやうな持前の上に、わはり強さといふ武器まで具へてゐるのだ。ただ、決行する覺悟さへ出來れば……。」

こんな風に考へながらチチコフは、魂の半は目覺めた力によつて何物かを經得したやうに思はれる。彼の本性は、人間が置かれるそれぞれの環境によつて彼をめぐつて渦巻く一切の事柄、紛糾、動向の如何に拘らず、いつ如何なるところでも遂行し得る或る一つの義務があつて、人間はそれを是非この世で果さなければならないといふことを、聽げながら悟つたやうである。そして都會の喧騒や人間の勞働を忘れて安逸無爲のあひだに想ひついたいろんな誘惑から遠かに懸離れた勤勞生活といふものが、眼前にまざまざと描き出されたため、彼は殆んど自分の不愉快な立場もすつかり忘れてしまひ、刺つさへ、自分がもう釋放されて、たとへ一部でも――を取り戻すことが出來さへすれば、この手酷い打擊をも恐らくは神の攝理として感謝しようと心に思つたのである。か、その時、彼の拘禁されてゐる汚ない納屋の片開戸がさつと開いて、一人の役人が入つて來た――サモスキートフといふ樂天家で、なかなかの敏腕家だ。肩幅が一アルシンもあり、足がすらりとしてゐて、同僚たちの言葉によれば、仲間としては申し分のない人間で、大の放蕩兒で無賴漢だとのこと。かういふ男は戰爭にでも行けば思ひ切つた偉功をたてるもので、容易に近づき難い危險な敵陣を突破して、敵兵の鼻の先きでまんまと大砲を盜み取るといつたやうな驚富

をさせたら、それこそうつてつけであらう。か、さうした軍籍に身を置いたら恐らくは神聞な人間になつてゐた筈の男が、その道に入らなかつたばかりに、今は具合よからぬことをするのに汲汲としてゐたのである。實に不可解なことであるが、この男には不思議な信念と捉とがあつた。彼は同僚に對しては飽くまで誠實で、決して仲間を裏切るやうなことがなく、約束をした限り必らずそれを守つたけれど、自分より目上の役人に對しては、恰かもそれを敵の砲兵陣地か何かのやうに見做して、あらゆる弱點、あらゆる間隙、もしくは手ぬかりに乘じて、一擧に突破しなければならないと考へてゐたのである。

「あなたのお身の上は何もかも知つてゐますよ、すつかり聞きましたからね！」と、彼は自分の後ろで扉がぱつたり閉まつたのを見すましてこう言つた。「なあに、大丈夫ですよ！　ひくひくなさることはありません、何とかなりますからね。あなたのためにみんなで一肌ぬぎますよ――あなたの手足と同樣に働きますからね。で、一回に對して三萬留だけ出して頂けば、あとは何もいりませんよ。」

「ほんとですか？」と、チチコフは口走つた。「それですつかり身のあかりが立つのですか？」

「ええ、すつかり！　その上に損害賠償まで受けられますよ。」

「で、そのお骨折りに對しては？」

「それが三萬留ですよ。何もかも引つくるめてそれだけなんです――我々の頂く分も、總督側

露光量違いの為重複撮影

の取り分も、祕書官に摑ませる分も、全部ひつくるめて。」

「ですがね、一體それをどうして差上げたものでせうかねえ？……私の持物は全部……手箱まで……今はすつかり封印をして、監視がつけられてゐることでせうが。」

「一時間もたてば、何もかもあなたの手許へ屆きますよ。どうです、では一つ手を打ちませうか？」

チチコフは相手に手を與へた。彼は胸がドキドキするばかりで、どうもそんなことが首尾よくゆかうとは信じられなかつた……。

「ではちよつと失禮しますよ！　それから、我々に共通の友達からあなたに託けがありましたよ——何より大切なことは、平靜と沈着だつてね。」

《ハハーン！》と、チチコフは思つた。《分つた、あの辯護士の細工だ。》

サモスギートフは姿を消した。チチコフは尙も相手の言葉に半信半疑のまま後に殘つたが、それから一時間とたたない中に彼の手許へは例の手箱が屆けられた——書類も金子も秩序整然として何一つ紛失してゐなかつた。サモスギートフは指揮官に化けてチチコフの宿へ乘りこむと、張込み中の番兵どもを不注意だといつて叱りつけ、監視を嚴重にするため隊長にもつと餘分の兵隊をつれて來いと命じておいて、まんまと手箱を手に入れたばかりか、なほその上、何かチチコフの不利になりさうなやうな書類を殘らず取りあげて、それを一緒に包んで封印するなり、夜分なくてはならない寢具のやうに見せかけて、早速一人の兵士に言ひつけてチチコフの許へ運ばせた。そんな譯でチチコフは大切な書類ばかりか、自分のか弱い軀を蔽ふに必要な防寒具まで手に入れることが出來たのである。こんなに手つ取り早く事が運んだので彼は言ひやうのない喜びを感じた。はやくも強い希望が頭をもたげて、またしても夕べの劇場だの、彼が後を追ひまはしてゐた踊り娘だのといつた、いろんな好餌を彼は夢見はじめたのである。田園だの靜寂だのといふものはだんだん影をひそめて、再び都會と喧噪とがまざまざと輝かしい姿を現はして來た……。おお、生活よ！

一方、裁判所と控訴院には恐ろしく大掛りな訴訟が起こされてゐた。書記連の鷲ペンは忙がしげに働き、三百代言たちは嗅煙草を嗅ぎ嗅ぎ、靈家のやうに仔細ぶつて、うねうねと曲りくねつた行に見入りながら、しきりに頭をしぼつた。例の辯護士が、まるで姿を見せぬ魔法使のやうに、蔭に隱れてすべての絡繰をあやつつて、誰ひとり氣のつく暇もないうちに、人々をすつかり煙に巻いてしまつたのである。混亂はますます增大した。不敵なサモスギートフは、前代未聞の大膽な行動で思ひがけない成功ををさめた。逮捕された例の女が監禁せられてゐる場所を嗅ぎつけると、彼はぢかにそこへやつて行き、如何にもキビキビした上官らしい態度で中へ入つたため番兵は敬意を表して彼の前で直立不動の姿勢を取つた。『長いことここに立つてゐるのかね？』——『はい、朝からでございます。』——『交替までまだ間があるのかね？』——『はい、まだ三時

露光量違いの為重複撮影

の取り分も、秘書官に摑ませる分も、全部ひつくるめて。」

「ですがね、一體それをどうして差上げたものでせうかねえ？……私の持物は全部……手箱まで……今はすつかり封印をして、監視がつけられてゐることでせうが。」

「一時間もたてば、何もかもあなたの手許へ屆きますよ。どうです、では一つ手を打ちませうか？」

チチコフは相手に手を與へた。彼は胸がドキドキするばかりで、どうもそんなことが首尾よくゆかうとは信じられなかつた……。

「ではちよつと失禮しますよ！　それから、我々に共通の友達からあなたに託けがありましたよ――何より大切なことは、平靜と沈着だつてね。」

《ハハーン！》と、チチコフは思つた。《分つた、あの辯護士の細工だな。》

サモスギートフは姿を消した。チチコフは尙も相手の言葉に半信半疑のまま後に殘つたが、それから一時間とたたない中に彼の手許へは例の手箱が屆けられた――書類も金子も秩序整然として何一つ紛失してゐなかつた。サモスギートフは指揮官に化けてチチコフの宿へ乘りこむと、張込み中の番兵どもを不注意だといつて叱りつけ、監視を嚴重にするため隊長にもつと餘分の兵隊をつれて來いと命じておいて、まんまと手箱を手に入れたばかりか、なほその上、何かチチコフの不利になりさうなやうな書類を殘らず取りあげて、それを一緒に包んで封印するなり、夜分なくてはならない寢具のやうに見せかけて、早速一人の兵士に言ひつけてチチコフの許へ運ばせた。そんな譯でチチコフは大切な書類ばかりか、自分のか弱い軀を蔽ふに必要な防寒具までも手に入れることが出來たのである。こんなに手つ取り早く事が運んだので彼は言ひやうのない喜びを感じた。はやくも強い希望が頭をもたげて、またしても夕べの劇場だの、彼が後を追ひまはしてゐた踊り娘だのといつた、いろんな好餌を彼は夢見はじめたのである。田園だの靜寂だのといふものはだんだん影をひそめて、再び都會と喧騷とがまざまざと輝かしい姿を現はして來た……。おお、生活よ！

一方、裁判所と控訴院には恐ろしく大掛りな訴訟が起こされてゐた。書記連の鵝ペンは忙がしげに働き、三百代言たちは嗅煙草を嗅ぎ嗅ぎ、畫家のやうに仔細ぶつて、うねうねと曲りくねつた行に見入りながら、しきりに頭をしぼつた。例の辯護士が、まるで姿を見せぬ魔法使のやうに、蔭に隱れてすべての絡繰をあやつつて、誰ひとり氣のつく暇もないうちに、人々をすつかり煙に卷いてしまつたのである。混亂はますます增大した。不敵なサモスギートフは、前代未聞の大膽な行動で思ひがけない成功ををさめた。逮捕された例の女が監禁せられてゐる場所を嗅ぎつけると、彼はぢかにそこへやつて行き、如何にもキビキビした上官らしい態度で中へ入つたため番兵は敬意を表して彼の前で直立不動の姿勢を取つた。『長いことここに立つてゐるのかね？』――『交替までまだ間があるのかね？』――『はい、まだ三時

間ございます。』――『ちよつと君に用があるんだ。君の代りに誰か他の兵をよこすやうに隊長に話さう。』――『はい、承知いたしました。』そこで彼は急いで家へ歸るなり、誰にも嗅ぎつけられずに證據を湮滅するため、自から憲兵に姿を變へ、口髭や頬髯までつけて出て來た――でこれがサモスギートフだとは惡魔にだつて氣がつかなかつた。彼は先づチチコフが住んでゐた家へやつて行き、出合頭の女をつかまへて、一味のこれまた素敏つこい二人の役人に引渡しておき、その足で、ちやんと口髭をつけ鐵砲を擔いで、前の番兵のところへとやつて來た。『さあ……のところへ行け、隊長がおれを一交替お前の代りに立たせるためによこしたんだから。』さう言つて前の番兵と交替すると、鐵砲を持つて部署についた。これだけのことをすれば澤山であつた。その間に前の女の身代りに何にも知らない別の女が理由も分らず無理矢理に押しこめられてしまつたのである。前の女は旨く何處かへ隱されてしまつて、その後どうなつたことやら誰にも分らなかつた。サモスギートフが軍人に化けて大活躍をやつてゐる暇に、例の辯護士は文官連の間に暴風をまきおこしてゐた。縣知事には、それとなく、檢事が彼を告發しようとしてゐると仄めかし、憲兵隊長には、密かにこの市に逗留中の監察官が彼を彈劾しようとしてゐると告げ、そのまた監察官には、更に上級の監察官がゐて、彼を彈劾しようとしてゐると告げた。結局、誰も彼もがこの辯護士に助言を求めざるを得ない立場になつたのである。恐ろしい混亂がもちあがり、彈劾が彈劾につづいて、誰ひとり知りもしなければ、また實際ありもしない事件までが、續々とし

て發きたてられた。その卷添で、誰それは私生兒で、どういふ身分の出生だとか、誰それには情婦があるとか、誰それの細君は誰それに血道をあげてゐるといつた風な、いろんなくだらないことまで明るみへ持出された。いろんな醜聞や誹謗が滅多矢鱈にこんぐらかつて、それがチチコフの事件や死んだ農奴とごつちやにされてしまつたため、果してどれが最もくだらないのか、ちよつとやそつとには會得むことさへ出來なかつた。いはば兩方とも同じくらゐ値打があるやうに思はれたのである。つひに一件書類が總督の手許へ屆けられた時、哀れな公爵にはいつたい何が何やら、てんで譯が分らなかつた。一件書類の拔萃を作るやうにと仰せつかつた役人は、極めて利口な、眼から鼻へ拔けるやうな男であつたが、幾ら頭をしぼつても事件の核心をつかむことが出來ず、殆んど發狂しないばかりであつた。それに丁度そのころ公爵は、いづれ劣らぬ不愉快な他のいろんな事件に忙殺されてゐたのである。縣の一部には饑饉が起こつてゐた。食料を配給するために派遣された役人連は職務を怠つて適宜の處置を取らなかつた。縣の他の一部では教會分離派が蠢動してゐた。何でも死せる魂を買ひ集めて歩く反基督が現はれたため死後も安息は得られないなどと流言を放つ者があつたからである。彼等は悔んだり罪を犯したりした。そして反基督の捕縛に事よせて、別に反基督でもない者を殺したりした。また他の地方では百姓が地主や郡の警察官に反抗して一揆を起こした。何でも彼等の間にどこの馬の骨とも分らぬ浮浪人が、今に百姓がみんな地主になつて燕尾服を身につけ、これまでの地主は絆纏にくるまつてどん百姓になり

さがる時が來るなどといふ風說を撒きちらしたからで、そんなことになつたら無闇に地主や警察官ばかり多くなつて堪つたものでないといふことには一向心づかず、一鄕全體が……の納稅を拒否したのである。いよいよ强行手段に訴へなければならなかつた。哀れな公爵はすつかり心を取亂してゐた。丁度そんなところへ徵稅代辨人のムラーゾフが來たと取次がれた。『こちらへ通せ』と、公爵は言つた。老人が入つて來た。

「そうら御覽なさい、あのチチコフを！　あなたはしきりにあの男を庇はれましたねえ。ところがどうです、今度あの男は、どんな卑劣な泥坊でも二の足を踏むやうな事件を惹きおこしたぢやありませんか。」

死せる魂

「お言葉ではございますが、閣下、手前にはどうもその事件といふのがよく會得めないのでございまして。」

「遺書の僞造です、それに違ひないのです！……さういふ不法行爲を犯したからには、公衆の面前で笞刑を加へる必要があります。」

「閣下、手前は決してチチコフを庇ふつもりでかやうに申しあげるのではありませんが、しかしその、まだこの事件は有罪ときまつた譯ではありませんでせう——まだ審理もすんでゐないことでもございますし。」

「生きた證據があがつてゐますよ。あの死んだ老婆の替玉になつた女がつかまつたのです。で

は一つ、特にあなたの面前でその女を訊問してみませう。」　公爵は呼鈴を鳴らして、その女を召喚するやうに命じた。

ムラーゾフは口を噤んだ。

「實に不名譽な事件です！　しかも、お恥かしいことには、この市の高級官吏がそれに關係してをり、知事までが卷添になつてゐます。第一あの人は、そんな泥坊や破落戸と行動を共にすべきではありません！」と、公爵はいよいよ熱して言つた。

「あの知事は亡くなつた老婆の相續人なんでせう。してみればあの人が權利を主張するのは當然です。また他の人間が四方八方から寄つて集るのも、これは閣下、人間にはありがちなことでございますよ。金持の老婆が亡くなつて、しかも豫め賢明妥當な處置が講じてなかつたのですもの、四方八方から美味い汁を吸はうとする輩が飛びついて來るのは人情でして……。」

「それにしても、どうして卑劣なことをするのです？……あの惡黨どもは！」と、公爵は憤懣の情に驅られながら言つた。「私の部下には碌な役人は一人もありません。どいつもこいつも人非人ばかりです！」

「それでは閣下！　私共のうち誰がいつたい完全無缺な人間といへませう？　この市の役人方は皆それぞれ卓れたところのある御仁ばかりで、多くの方が事務には大變よく通じてをられますが、とかく罪惡にはどなたでも陷り易いものでございますて。」

「ねえ、アファナーシイ・ワシーリエヴッチ、あなたは私の知つてゐる限り、唯一の潔白な方ですが、そのあなたが、とかく惡者でさへあれば無闇に肩をお持ちになるのは一體どういふものでせうねえ？」

「閣下、」とムラーゾフが言つた。「あなたの惡者だと仰つしやる男が誰であるにもせよ、矢張り人間には違ひないでせう。その人間の犯す惡事の半ばが、無智と粗暴に起因することを知りながら、どうしてそれを庇はずにをられませう？　我々は一歩ごとに不正を行ひ、一分間ごとに他人の不幸の原因になつてゐるのですよ――それも、別に惡意があつてではなしに。第一、閣下にしてからが、矢張り大きな不正を犯しておいでになるのです。」

「何ですと！」と公爵は、話が意外な方向轉換をしたのにすつかり面喰らひ、やや呆れ顔で叫んだ。

ムラーゾフは茲で言葉を切つて、何か考へるやうに、ちよつと口を噤んでゐたが、やがて、『例へば、あのデルベンニコフの事件にしてもですよ』と言つた。

「アファナーシイ・ワシーリエヴッチ！　あれはそもそも國家の基をなすところの法律にそむく罪で、いはば祖國を裏切るも同樣なんですよ！」

「手前は決してあの男を正しいといふのではございません。けれど、世故に長けてゐないため、つい他人に唆かされて誘惑に負けた青年を、まるで張本人の一人ででもあるやうに罰することが

果して正しいでせうか？　あのデルベンニコフも、ウォロノイ・ドゥリャシノイとかいふ男も、同罪といふ判決を受けてをりますが、二人は決して同罪ではございません。」

「後生です……」と、公爵は明らかに心の動揺を見せながら言つた。「それについて何か御存じなんですか？　御存じでしたら一つお話し下さいませんか。實はまだつい最近、彼得堡へ向け、直接、あの男の罪の減刑について書面を差出したやうな譯ですがね。」

「いえ、どういたしまして、閣下、手前は決してあなたの御存じないことを知つてゐて、かやうなことを申しあげるのではありません。尤も、確かに一つあの男の利益になる事情もあるにはありますが、他に累が及びますので、あの男自身、それを申したてることは承知いたしますまい。ただ手前は、閣下があの場合すこしお急ぎになり過ぎたのではないかと存ずるだけでございますよ。いや、御免くださいませ、これは手前のぼんくらな頭で判斷しただけのことでございまして。閣下は再々、手前にあけすけに述べるやうにと仰せになりました。まだ役についてゐる頃、手前もよく勞働者を手がけましたが、性の善いのや惡いのや、いろんなのがありましたよ。兎に角その人間の前身を考慮に入れることが大切です。と申しますのは、萬事を冷靜に吟味もせず、初めからいきなり叱鳴りつけたのでは、相手を吃驚させるだけで、到底ほんたうのことを自白させることは出來ないからでございます。ところが、親身になつて、兄が弟に訊ねるやうに優しく問ひ糺しますれば、向ふから進んで何もかも洗ひざらひ打明けて、罪の輕くなることを顧ひもしなけ

れば、誰に對しても怨みなど抱くものではありません。それといふのも、彼を罰するのは判官たる人間ではなく、法律であることをはつきり認めるからでございます。」

公爵はじつと考へこんだ。ちやうどその時、一人の若い役人が入つて來て、折鞄を持つたまま恭〻しくその場に立ちどまつた。その若々しい、まだ潑剌とした顏には、勤務に對する並々ならぬ勞苦の色が現はれてゐた。さすがに特殊の使命を帶びた人物であることがそれと知られた。これは事務を遂行するに當つて常に con amore（愛者をもつて）であるところの少數の人物の一人であつた。別に功名心や利慾に釣られた譯でも、他人を眞似た譯でもなく、只管、自分の坐るべき地位はこで、決して他所ではないと思ひ、また自分がこの世に生を受けたのもそれがためだと確信すればこそ、彼はその職務に就いてゐたのである。微に入り細を穿つて審理の歩を進め、紛糾を極めた難件のあらゆる端緒を摑んで、それに明快な判定を下すこと――それが彼の任務であつた。さうした夜もおちおち眠られぬ慘憺たる苦心や努力も、事件の謎がやうやく解け、隱れてゐた動機も明白になつて、事件の全貌を適確明瞭に、誰にも分り易くはつきりと、言葉すくなに語ることが出來るといふ確信が持てさへすれば、十二分に酬いられるのである。ちやうど或る大作家の極めて難解な一句が解けて、その思想の本義が明瞭になつた時、學生が狂喜するにも增して、紛糾した事件の解決の鍵が仄見えた時、彼の心は喜びに躍るのである。その代り……。★

「饑饉に襲はれてゐる地方へ穀物を……。さういふ方面のことでしたら役人方より手前の方がよく心得てをりますから、誰には何が必要かといふことを一つ自分で取調べてみませう。又よろしければ、教會分離派（ラスコーリニキ）の連中とも話しあつてみたいと思ひますよ、閣下。あの連中も、手前どものやうな一平民となら、胸襟を開いて語りますから、あはよくば和氣藹々裡に事ををさめることが出來るかも知れません。ところが、お役人衆にはそんなことはとても出來ない相談です。まづこれに關してやたらに報告の往復ばかり頻繁になり、その上お役人衆はすつかり書類の中へ卷きこまれてしまつて、事の眞相などとても分るものではありませんからね。手前は金子など一文も頂戴しようとは思ひませんよ。こんな、人が餓死をしかかつてゐるといふやうな非常時に、懷ろ勘定などするのは誠に恥かしいことです。手前のところには穀物の貯藏がありますので、只今も西伯利亞へ向けて送り出したばかりでございまして、またこの夏も送るつもりでございます。」

「あなたのさういふ奇特なお心懸に對しては、神の酬いが屹度ありますよ、アファナーシイ・ワシーリエギッチ。私は敢て何事も申しあげません――あなた御自身お感じになるとほり、もはや口で何を言つても無意味ですからね。ただ一言、例のお申出の件に就いて申しあげますが、どうか考へてもみて下さい――ああいふことを知らん顏でうつちやつて置く權利が私にあるでせうか、ああいふ惡者どもを許すことが果して私にとつて正當な、良心に恥ぢぬ行ひでせうか？」

★　この言葉のあとで百三十三枚目の草稿が破れてをり、以下相當大量の紙數が拔けてゐる。〔原書註〕

「閣下、決して決してあの人たちのことを悪者だなどと仰つしやつてはなりませんよ、況んやあの人たちの中には立派な御仁も澤山あるのですからね。人間の置かれる境遇といふものは難かしいものですよ、閣下、どうしてどうして、まつたく生優しいものでばございません。或る人がてつきり罪を犯してゐると思はれるやうな場合でも、調べてみると、全然それが見當ちがひであつたといふやうなことも屢〻ございますからね。」

「だが、私が今見逃しておいたら、あの連中の方で何を言ひだすか分りませんからね。中には今後ますます增長して、總督をへこましてやつたなどと言ひだす手合ひも出て來ますからね。第一にあの連中が私を尊敬しなくなりまして……。」

「閣下、失禮ながら愚見を申し述べますが、一つあの人たちを一緒にお集めになつて、閣下が何もかも御存じになつてゐることをお言ひ聞かせになり、閣下御自身の立場をば、いま手前にお話し下さいましたのと寸分ちがはぬ言葉で彼等の前に御開陳になりまして、もしもかういふ立場に置かれた場合、君等だつたらどうするかと、あの人たちに一々お訊ねになつてみたら如何かと存じますが。」

「成程、さうすると今後あの連中は、良からぬことを企てたり私利私慾に耽つたりはしないで、ずつと高尚な行ひをするやうになるとお考へになるのですね？　ところがどうして、あの連中は私を馬鹿にするだけですよ。」

「手前はさうは考へませんよ、閣下。人間の感情といふものは、たとへ普通より一段と惡い人間にあつても、やはり公平なものでございます。これが露西亞人でなく、猶太人か何かであれば格別……。いいえ、閣下、あなたは決して御自分といふものをお蔑しになる必要はありませんよ。いま手前の前でお話しになつてゐるとほり、何もかもお話しになつたらいいと思ひます。あの人たちは閣下のことを、鼻柱ばかり強い野心家で、他人のいふことは何一つ聞かず、恐ろしく自信の強い方だと惡口を言つてをりますからね、一つ、ありのままをぶちまけておやりになつたらいいでせう。一向お差支へはないぢやありませんか？　閣下は正しいことをなすつていらつしやるのですもの。あの人たちの前ではなく神様の前で懺悔をなさるやうに、あの人たちにお話しになつてみて下さい。」

「アファナーシイ・ワシーリエヴィッチ、」と、公爵はためらひ氣味に言つた。「そのことはよく考へてみることにしますが、とにかく御忠言に對して厚くお禮を申しあげます。」

「で、閣下、チチコフの釋放をお差許し願ひたいのですが。」

「では、あのチチコフといふ男にさう言つて下さい、ここを一刻も早く、それも出來るだけ遠方へ立退くやうにと。もう、あの男ばかりは斷じて許さないつもりでしたけれど。」

ムラーゾフは公爵にお辭儀をするなり、そのまま眞直ぐにチチコフのところへ引返した。來てみると、チチコフはもう上機嫌で、相當の割烹店からでも取りよせたらしい、硬質陶器の器に入

れたかなり上等の料理を悠々と平らげてゐた。老人は抑〻の話の切掛けから、チチコフがはやくも誰か狡い役人に渡りをつけたなと見て取つた。そればかりか、例の物識りの辯護士までがこれに關係してゐることを知つた。

「よろしいかね、パーウェル・イワーノギッチ、」と、彼は言つた。「私はあなたが即刻この市を立去るといふ條件で、あなたの釋放方を承知させて來ましたよ。さあ、身のまはりの物をすつかり取纏めて、さつさとお發ちなさい、一刻も猶豫はなりませんぞ、一層ことが面倒になりますからね。私はあなたが或る男に唆かされていらつしやることは知つてゐますよ。ですが、これは祕密の話ですけれど、今にもう一つの事件が露顯しますよ、さうなつた曉には、もはや收拾の道がありませんからね。勿論その男は面白半分に他人を陷れるのですが、さうなつたら萬事休すですよ。さつきお別れする時には、あなたは今よりずつと良い心掛けになつておいでした。私はあなたに眞面目に忠告してゐるのですよ。決して決して、人が來世のことは考へもせずに、それがまるで現世に於ける幸福の源ででもあるやうに、お互ひに啀みあつたり殺しあつたりしてまで奪ひあふ財產などは問題ぢやありませんよ。どうか私のいふことを信じて下さい、パーウェル・イワーノギッチ、人間がこの娑婆で互ひに齒を剝いたり角を突きあつて、爭奪しあふところのものを一切うつちやつて、精神的な富について思ひをいたさない間は、地上の財產についても決してよき秩序を打建てることは出來ませんよ。飢餓と窮乏の日がやつて來ます、全國民に對しても

各個人に對しても……。これは明白な事實です。あなたが何と仰つしやらうとも、肉體は精神に從屬してゐるのですからね。どうしてさう、何もかもうまくゆくことが望まれませう？　もう死んだ魂のことなどはお考へにならないで、あなた御自身の生きた魂のことをお考へになり、潔く別な道をとつてお進みなさい！　私も明日は旅に出ます。吳々もお急ぎになることですよ！　でないと、私がゐなくなつてからどんな災難が降つてわかないにも限りませんからね。」

かういふと、老人は出て行つてしまつた。チチコフは物思ひに沈んだ。人生の意義がまたしても重大なものに思はれて來た。『ムラーゾフの言ふとほりだ』と、彼は呟やいた。『いよいよ別の道をとつて進む時が來たのだ！』彼はさう言つて、牢屋を出た。後ろから番兵が彼の手箱を運んで來た……。セリファンとペトゥルーシカとは、主人の釋放されたことをこの上もなく喜んだ。『ぢやあ、お前たち』と、チチコフは優しく二人に向つて言つた。『仕度をするんだよ、出發しなきやならんから。』

「景氣よく一つ馳らせませうよ、パーウェル・イワーノギッチ！」と、セリファンが言つた。

「道路もおほかた固まつたでがせうよ、だいぶ雪が降りましただから。ほんとに、もうそろそろこんな市は引きあげた方がようがすよ。すつかり鼻について、見るのも厭になりましただもの。」

「馬車大工のとこへ行つて、輕馬車に橇をつけさせておくんだぞ。」　さう言つておいて、チチコフは市內へ出かけて行つたが、誰のところへも暇乞ひに寄る氣はなかつた。ああいふ事件を惹

起こした後のこととて、さすがに極りも悪く、そのうへ市ぢゆうに、自分についていろんな不愉快極まる取沙汰が行はれてゐたのだから尚更である。彼はなるべく人に逢はないやうにして、ただ、あのナプリノ風の炎に煙を混ぜたやうな色の服地を買つた店へこつそり立寄り、同じ服地を燕尾服とズボンにするために改めて四碼買ふと、その足でこの前と同じ仕立屋へやつて行つた。仕立賃を二倍だすと言はれて親方は、それでは一つ馬力を掛けようといふので、職人を急きたて急きたて、夜どほし蠟燭の灯りで、針やアイロンや齒を使つて仕事を急いだため、少しは遲れたけれど、燕尾服はその明けの日に立派に出來あがつた。馬車にはもうちやんと馬が繋けてあつた。それでもチチコフは新調の燕尾服を軀に合はせて見た。それは前のと寸分違はず立派に出來てゐた。だが、何といふことだらう！　自分の頭に白いつるつるした禿の出來てゐることに氣がついて、彼は恨めしさうにかう呟やいたものだ。『何のために、ああ烈しく取りのぼせたのだらう？　まして頭髮など引き搖るには及ばなかつたのに。』　仕立屋に勘定を拂ふと、彼は一種異樣な心境でつひにその市を出發した。彼はもはや以前のチチコフではなかつた。それは以前のチチコフの殘骸のやうなものであつた。彼の魂の內的狀態は、新らしく建直すために解體された建物にも比すべきものであつたが、しかしまだ建築師の手許から決定的な設計圖が屆かないため新らしい建築も始められず、人足が手を束ねてうろうろしてゐるといつた有樣であつた。チチコフよりも一時間さきにムラーゾフは、蓆掛けの幌馬車でポタープイチと一緒に出發した。そしてチチコフ

が出發してから一時間の後、彼得堡へ立つに當つて公爵は市の役人全部一人殘らずに會見したいといふ指令を出した。

總督邸の大廣間には、上は縣知事から九等官の末に至るまで、この市の役人といふ役人が全部集まつた――事務官や參事、奏任官や判任官、キスロエードフだの、クラスノーソフだの、サモスギートフだのといつた連中で、賄賂を取つたのも取らないのも、良心を曲げたのも、少しか曲げなかつたのも、全然曲げなかつたのもといつた鹽梅に。一同は不安と動搖をもつて總督の出現を待つた。公爵は別に氣難かしくもなければ朗らかでもないやうな面持で入つて來たが、その眼差と步調には一樣に牢乎たるものがあつた。滿堂の役人連は一齊にお辭儀をした――中には最敬禮をする者もかなりあつた。

「私は彼得堡へ出發するにあたつて、諸君御一同にお目にかかり、且つまた理由の一端をお話しておくことを至極妥當だと存ずる次第であります。我々の身邊には目下、甚だ忌はしい事態が持ちあがつてをります。諸君のうち大多數の方々は、私が如何なる問題についてお話してゐるかをよく御存じのことと思ひます。この問題につづいて、それにも劣らぬ不名譽な他のいろんな問題が續々と露顯いたし、つひには、今日まで私が潔白な方だと信じてゐた人々までそれに關係してをられることが分つたのであります。またこんな風に事を紛糾させて、尋常一樣の方法では問題の解決を全然不可能ならしめようといふ底意の隱れてゐることも私には讀めてをります。それ

ばかりか、當人はこの問題に關係のあることをいかにも巧妙に隱してをりますけれど、そもそも誰が主謀者で、誰の隱れた……によるかといふことも、ちやんと分つてをります。しかしながら私は、それを書類の上の形式的な審理によらずして、戰時に於ける軍法會議に準じ、迅速に決著してしまはうと考へるのでありまして、この問題について委曲を奏上いたしますれば、必らずや陛下におかせられても私にその權限をお差許しになることと存じまする。かくの如く、尋常の裁判では事件の審理が不可能な場合とか、一件書類が戸棚ごと燒失したやうな場合、また今回のやうに、無關に局外から虛構の中立てをしたり、虛僞の告訴を提出して、それでなくてもかなり曖昧な事件をいやが上にも紛糾させようと努めてゐるやうな場合には、私は軍法會議の形式で事件を解決するのが唯一の方法だと考へますが、諸君の御意見は如何でせうか？」

公爵は恰かも答へを待つやうに、ちよつと言葉を切つた。一同はじつと眼を伏せたまま、立ちつくした。大多數の者の顏色は蒼白になつてゐた。

「私にはもう一つの事件も分つてをります。それを惹起こした人々は誰にもそれが分らないものと確信してゐるやうではありますが。最早この事件は書類による手續を踏む必要がないのであります。と申しますのは、この事件には私自身が原告にも訴願人にもなりまして、私自身、明確な證據を提出いたすからでございます。」

誰か役人の中の一人はぎよつと身慄ひをした。極く臆病な幾人かは矢張りどぎまぎした。

「從つて、主謀者は位階と財產を失なひ、その他の者も免官になることは當然であります。いふまでもなく、中には罪もないのに卷添になつて苦しむ人も多いことと思ひます。どうも致し方がありません。あまりにも破廉恥な事件で、司直の手を煩はす他はありません。そんなことをしても、免職になつた連中の後へはどうせまた別な連中が坐り、これまで廉直であつた者が破廉恥になり、將來信任を贏ち得べき筈の人間が職を裏切り、詐欺を働くに至るでせうから、いつかう他への敎訓にもならないことは知つてをりますが、それにも拘らず、司直の聲が默つてはをりませんから、私はどこまでも峻嚴な態度に出でざるを得ないのであります。私のとつた手段があまりに峻烈過酷だといつて非難する向きもあることと存じますが、しかしさういふ人々は更に……非難……だらうことを承知してをりますから、私はそれを單なる司直の冷酷無情な武器に變へて……の頭上に打ち下ろさなければならないのであります。」

一同の顏には思はず戰慄が走つた。

公爵は落つきはらつてゐた。その顏には憤りの色も昂奮の色も現はれてゐなかつた。

「ときに今、多くの方々の運命の鍵を手に握り、何人の懇願をも頑として聞入れなかつたところのこの私から、諸君御一同に對してお願ひがあるのです。この私の願ひを聞入れて頂くことが出來さへすれば、何もかも一切を水に流して、忘れられ、許されるやうに、私は諸君御一同により代つて斡旋の勞をとるつもりであります。さて、私のお願といふのはかうであります。如何な

る手段をもち、如何なる恐怖、如何なる懲罰をもつて臨んでも、不正を根絶するといふことが所詮不可能であることを私は知つてをります。それは既にあまりにも深く人心に根をおろしてゐるからであります。收賄といふが如き卑劣な行爲が、生まれつきに於いては決して卑劣でない人々にとつてすら止むに止まれぬ必要不可缺なこととされてしまつてゐるのであります。もはや大多數の人々には、この一般的な大勢に抵抗して進むことが殆んど不可能になつてゐることもよく知つてをります。しかしながら今や私は、國民各自が祖國を救ふために一切を投げ出して公に殉ずべき由々しくも尊嚴なるこの時にあたつて、その胸裡になほ一片、露西亞人の心情を有し、せめて幾分でも『高潔』といふ言葉の分る人士に對してなりと、大聲叱呼しなければならないのであります。我々のうち誰により多く罪があるなどといふことは、もはや問題ではありません！　恐らく私こそ、誰よりも罪が深いでせう。私は當初、あまりに嚴しく諸君を遇したかも知れません。私は疑ひのあまり、眞實から私のためにならうとして下さつた諸君を突きのけたかも知れません。しかも私としても矢張り、さういふ方たちと同じ心持でありましたらうものを……。もしさういふ人々にして眞實正義を愛し祖國の福祉を冀つてゐたのならば、私の傲慢な仕打に憤慨などしてゐないで、自己の野心を殺して一身を犧牲に供してゐた筈であります。從つて私も、さういふ人たちの犧牲的精神や善に對する高い愛を見逃し、つひにはその有益賢明な忠言に耳を藉さないやうな結果にはならなかつたでありませう。兎に角、長官が部下の氣風に順應するよりも、寧ろ部

下が長官の氣風に順應するのが當然であります。部下にとつて長官は一人でありますが、長官の下には部下が幾百とゐるのでありますから、少なくともその方が正當であり、容易でもあります。しかし今更どちらの責任が重いの輕いのといふ議論はやめませう。何よりもまづ我々は祖國を救はなければなりません。我々の國土を滅ぼすものは二十の夷狄の入寇には非ずして、實に我々自身であります。既に正當なる支配權を他所に、あらゆる正當なる支配權を遙かに凌駕する他の支配機構が形成されてをります。いろいろの條件が定められ、すべてが評價されて、その價値は普く知れ渡つてさへゐるのであります。これでは如何なる統治者といへども――たとへそれがあらゆる立法者や統御者を凌駕するほどの智者であつても、惡を匡正することは出來ないのであります。如何に他の役人を監督につけて、惡い役人の行動を取締つたところで、效果はないのであります。我々のすべてが、かの民衆蜂起の時代に……反抗して立上つたと同樣に、不正に對抗して蹶起すべきであることを痛感するまでは、すべてが不成功に終ることでありませう。私は露西亞人として、まつたく同じ血、同じ血統によつて諸君と結びついてゐる人間として、今諸君に訴へるのであります。私は諸君のうち、高潔な思想とは如何なるものであるかといふ觀念を幾分でも具へてをられる方々に訴へるのであります。人間がどこへ行つても必らずついてまはるところの本分を想起して頂きたいのであります。己れの本分と、この地上における自己の職分に對する義務とを、どうかもつとよく御考察ねがひたいのであります。と申しますのは、それが我々一同に

はもはや漠然たるものとなつてをりまして、我々は辛うじて……。」

譯註

第一章

一九 フェーディカだの白麵麭（ブールカ）だの　フェーディカはフョードルの卑稱、白麵麭（ブールカ）はぶよぶよ肥つた人間を揶揄する呼稱。玆では校長がフョードル・イワーノヴィッチ某であるから、生徒がそれを揶揄侮蔑してさう呼んだのである。

第三章

八一 メディチのヴィーナス　ミロのヴィーナスと竝稱される有名な古代羅馬のヴィーナス像。

八六 アルシン　露西亞の尺度單位。二尺三寸五分弱に相當する。

九一 デシャチン　正しくはデシャチーナ、土地面積の單位。一町一段五歩弱に相當する。

一二五 ヴィルギーリイの『田園詩（ゲオルギカ）』　西暦紀元前七十年に生まれて十九年に死んだ有名な羅馬の詩人ヴィルギーリイが農耕のことを歌つた詩集。

第四章

一九六　トゥリーシカの百姓外套（カフタン）　クルイロフの寓話中に『トゥリーシカの百姓外套（カフタン）』と題する一篇があつて、トゥリーシカ（トゥリフォンの卑稱）と呼ぶ百姓が自分の百姓外套（カフタン）を修繕するのに、かういふ方法でやりくりをしたことが書いてある。

一九七　（赤い丘）の祭り　舊スラヴ時代から傳はつた春の祭りで、耶蘇復活祭につづく最初の日曜日に當り、又この日には婚禮が多く擧げられる。

第……章

一八四　第……章　この章は何章とも記されてない。これは明らかに著者の最初の草稿そのままで、この部分を何章とするかさへまだはつきり決められなかつた頃に書かれた古い原稿がここへ闖錄されたことを示してゐる。

〃　ガムブス　そのころ彼得堡にあつた高級な家具店。

一八五　ニジェゴーロドの定期市　ニジェゴーロド縣の首都ニジニ・ノヴゴーロドで開かれる露西亞最大の定期市で、十三世紀ころカザン縣下のアルスクで始められ、十六世紀にニジェゴーロド縣のマカーリエフ市に移され、更に一八一七年ニジニ・ノヴゴーロドに移されたのである。この定期市は七月二十五日から八月二十五日までつづき、全露西亞及び中央亞細亞の商人が集まつて厖大な商取引をなし、莫斯科地方の工業生產品、ウラル地方の鐵製品、西比利亞地方の毛皮類、中央亞細亞の綿等が玆で交易されたのである。

一八八　ナヴリノ　希臘の海港都市。一八二七年、露英佛の聯合艦隊が埃及土耳古軍を擊破せるナヴリノの戰ひで有名なところ。ナヴリノ風の蔓苔桃色といふのは淡い赤豆色のことである。

二〇二　カルルスルーエ　南獨逸バーデンの首都。

二三七　教會分離派（ラルコーリニキ）　十七世紀及び十八世紀の前半に於いて正教々會から分離した宗派に屬する舊教徒の稱。初めニコン總主教（1605—1681）の企てた舊希臘正教會の祈禱書の改訂並びに禮拜儀式の革新に不滿を抱き、頑に舊習を固守した大多數の僧侶を中心に組成されたもので、あらゆる迫害を忍びながら飽くまで新樣式に反抗し、後には北部露西亞、西比利亞等の僻地に移住してまで、頑迷固陋な宗教樣式を墨守した舊教徒である。

18291

昭和十四年十月二十五日 第一刷發行
昭和二十三年十二月二十五日 第三刷發行

死せる魂 下

定價六拾五圓

譯者 平井肇

東京都千代田區神田一ッ橋二丁目三番地
發行者 岩波雄二郎

東京都千代田區神田錦町三丁目一番地
印刷者 井關好彦

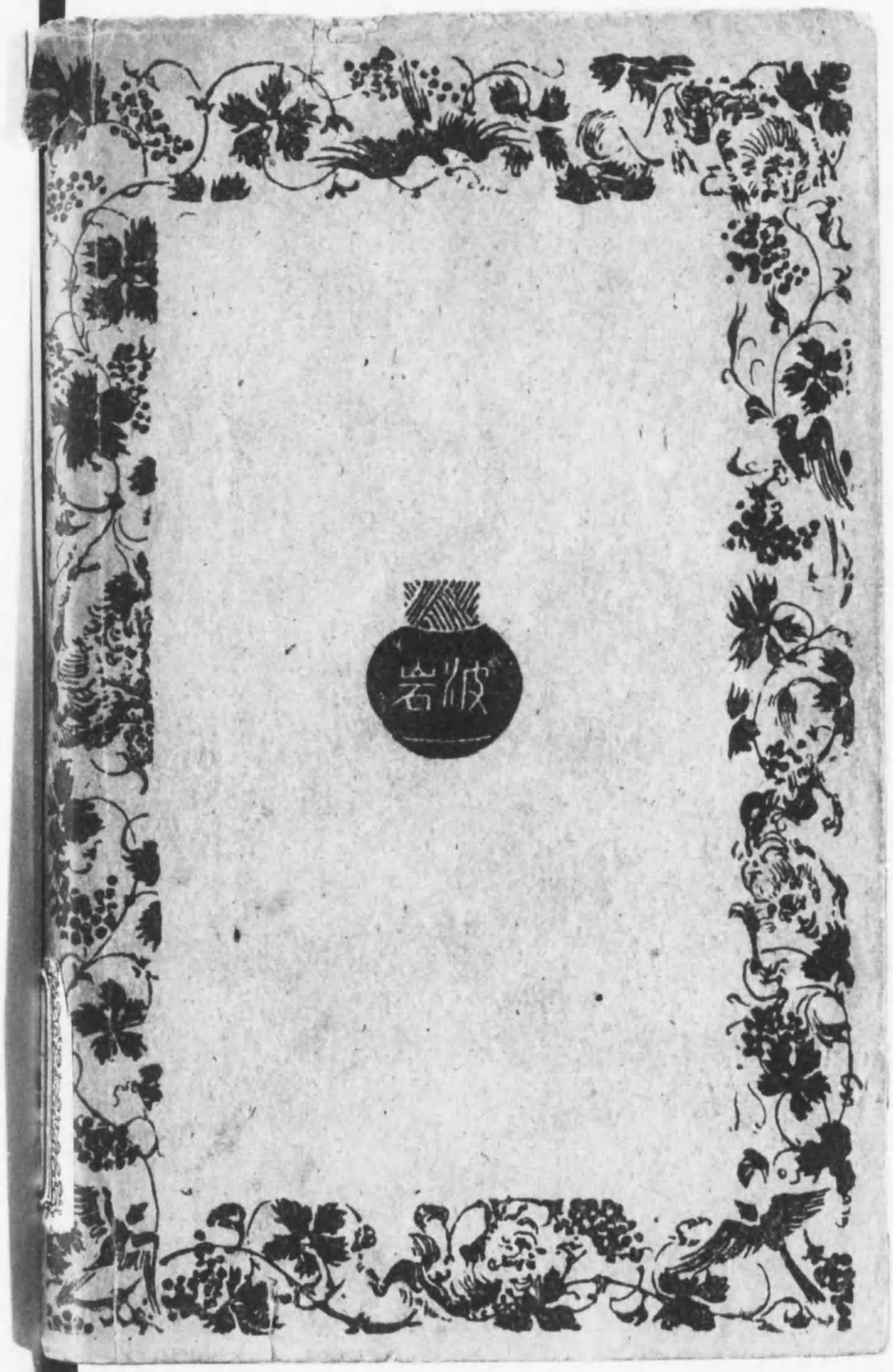
東京都千代田區
神田一ッ橋二ノ三
發行所 岩波書店
會員番號A一〇九〇〇四號

大同印刷・田中製本

~~23.12.21~~

24年 4月 21日 351

閲六 閲六 閲八

閲覧済

終